
降り積もる雪は灰色に

深山真人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

降り積もる雪は灰色に

【Nコード】

N1946H

【作者名】

深山真人

【あらすじ】

クーデターから誕生した新国家と、それに対抗するべく発足された国家連合軍。国連最高の特殊部隊といわれるアルファ大隊に、一等軍曹「如月咲夜」は所属していた。重ねられる戦火、消えてゆく戦友。一つを失うごとに、一つの真実が浮かび上がる。そして灰色の雪の中、彼は全てを知る。

第一章 第一話

世界が変わるとしたら、この世界そのものが一度は壊れるだろう。それほど、世界とは変わることのできないものなのだ。

元

米国副大統領ジョセフ・F・アダムス

聴覚のほとんどを消すヘリのローター以外で、如月咲夜きわのさくやが最初に捉えたのは遠い砲弾の音だった。腰まである紅い長髪に、軽量の対弾装甲を取り付けた黒の戦闘服という出で立ちの青年は、国連軍の標準的装備であるM28A4アサルトライフルをスリングで肩から吊るしている。それには多少の手が加えられており、ダットサイト射撃照準器を付け、銃口はサイレンサー装着用ノズルのものに変えられている。

さらに後ろ腰には予備兵装のM221ハンドガン、右腰には近接戦闘用に鞘入りの凝固液体金属刀サミダレが、それぞれ専用ホルスターに収まっていた。右胸の辺りには小型化された破片手榴弾が四つ。戦闘に備えた、いわゆる完全装備だ。

左右にミニガンとロケット砲を備えたこの小型高機動ヘリHSH-68は、咲夜を含めて三人の兵士を運んでいた。

一人は咲夜と同じような装備の分隊長、アイザック・レオハルト大尉。イギリス陸軍の特殊部隊出身である彼は、銀の髪と青く光る双眸を収めている。アイザックもまた、咲夜と同じようにM28を吊っているが、背中には彼が愛用する近接兵器がある。

ガンブレードと呼ばれるそれは、巨大な片刃の剣に旧式の軍用ライフルを内蔵したように見える。というよりも、本当に内蔵しているのだ。この武器は剣でもあり、七発という現代では不足とも取れる装弾数を持つライフルでもあった。

そしてもう一人、この分隊で唯一の女性であり最も重量がある装備の桜木未来^{さくらぎ みらい}。咲夜より一つ下の階級で一等軍曹の彼女は、M28よりも一回り巨大な特殊ライフルMR-18を携えていた。

通常は全弾発射^{フルオート}や単発発射^{セミオート}の操作をするセクターが、この銃の場合、銃の性質そのものを変化させる。内部に独自の可変機構を有しており、5.56mm弾を単発発射する状態から、手動のボルトアクションで大型弾を放つ狙撃状態へと瞬時に変わるのだ。

最高クラスの狙撃手である少女は、そのために自作した特殊弾を右腰の硬化プラスチックケースに入れている。支給品は信用できないといって、大半を自分で作り上げてしまうのだ。弾薬だけでない。銃身上部の半自動倍率スコープすら、彼女の作品だ。ただ単に射撃技術に優れた者とは、わけが違う。

最も、普段からこの屈強な男達の中では小柄に見える未来がこれを持つと、その不釣り合いで自分をさらに小さく見せてしまうため、彼女をよく知らなければ気付くことなど無いのだが。

その小さな少女が、ショートカットに整えた茶髪をかき上げた時だった。突然、米海兵隊の大型ヘリMH-71が接近してきた。

『国連軍か？』

隊長であろう男の声は、高性能通信機を内蔵したヘッドセットから聞こえた。同じくヘッドセットを介して、アイザックが答える。

『アルファ第二小隊、第二分隊だ。おまえ達は？』

『米国海兵隊第一偵察大隊、第十六小隊のムーア少尉です。特務にお目にかかれて光栄です、大尉』

そう言つて、ムーアは微笑を返す。

アイザック達三名は、国連でも最高峰の部隊、特殊任務遂行隊に所属していた。特務の通称で呼ばれる彼等は、陸と空のそれぞれ一個大隊に分けられている。その中でも最も先陣となる斥候部隊が、アルファだった。人間離れしたアイザック達に、ムーアのような末端の海兵隊員が尊敬の念を表すのも、珍しくない。

『俺達もだ、少尉』

『それは何よりです』

と、ムーアは自機のパイロットに呼ばれ、顔を背ける。何を話しているのかはわからないが、大方の見当はつく。再びこちらを見たとき、彼は言った。

『自分達は先に行かせてもらいます。大隊長直々に招待状を頂いたんでね』

『なら席を取っておいてくれ』

アイザックの返事に、ムーアは破顔し答える。

『了解。会場で待ってますよ』

軽く敬礼して、海兵隊のヘリは速度を上げた。直後――

『くそッ！　つかまれ！』

驚愕に満ちた小型ヘリのパイロットの声が、ヘッドセットに伝わる。それが言い終わるかどうかの時点で、機は大きく左に曲がった。僅か二秒後、数瞬遅れて空が爆発する。否、爆発したのは空ではなく、遙か遠方、それも正面角度から放たれた対空榴弾だ。避けた次の瞬間には、もう新たな爆風が巻き起こる。

『サンダー2-2よりCP！　敵の対空砲火を受けている！』

一秒ほどで返って来たのは、兵士とは違う無機質な声音。

『こちらCP。サンダー2-2、高度を500下げろ。繰り返し、高度をあと500下げろ。進路はそのまま、前進。砲台には第一陣のACATが向かっている』

指揮所のオペレーターが話す間にも、爆発は断続的に起こる。時に後方で、時に前方で。右左の区別もなく発生するそれは、さながらこの小さな飛行機械を取り囲んでいるように思えた。

『く……了解……！』

言って、パイロットは通信を終える。言われた通りに下降すると、多少は爆炎を見ずに済んだ。だがそれでも、撃墜の危険があることに変わりはない。

『海兵隊は？』

少女の声――未来だ。操縦桿に付きっきりのパイロットの代わり

に、隣の副操縦士が答える。

『無事だ。操縦士は良い腕をしている』

『おい、俺は三流だったのか？』

語気も荒く、パイロット。こんな状況でも、軽口を叩く余裕があるのは流石といったところか。

『誰もそんなこと言っただけ——』

言葉は途切れる。機内には、けたたましい電子音が響く。

『レーザー照射！？』

『あれだ！ ガンボート、3時方向、距離700！ クソツたれが、SAM（対空ミサイル）なんか積んでやがる！』

言うが早く、ヘリは回避機動に移った。しかし、すでに海面から10mと無い位置を飛行しているうえに、敵の長距離砲のおかげで上昇もできない。左右に限定された飛行では、大した回避運動もままならなかった。

『畜生ッ！ 振り切れねえ！！』

パイロットの苦渋の叫び。そして警告音は、ロックオンされたことを知らせる音程に変わった。

操縦席の二人、彼等が運ぶ分隊の三名に、緊張が走った。五人の兵士に逃げ場は無いのだ。危機感に乏しい警告音の中でも、死を覚悟するには充分過ぎる。無意識に死ぬ瞬間を待った、その時——

だが次の瞬間に聞こえたのは、敵ミサイル発射を知らせるものではなく、火器を満載した小型艦が爆発する遠雷のような響きと、友軍からの無線通信だった。

『サンダー2-2、こちらファルコ1。まだ生きてるか？』

ジョークにしてはきつい台詞を、味方の戦闘機乗りは飛ばしてくる。

『クソがッ！ なんてこった、お前らかよ！』

機長の声。こちらは冗談ではなく、本気で言っていた。

『ファルコ2よりサンダー2-2。恩人に言うには感謝の念が欠けてるぜ』

『黙りやがれ、マツク。……ちくしょう、同じ特務に助けられるとはよ』

心底悔しそうな声は、ヘッドセットを介して咲夜達にも届く。恐らく、本気で戦闘機に助けられたことを悔やんでいるのだろう。世の全てのパイロットがどうかは知らないが、このHSH-68を操る機長は、どうしてか人類の歴史上最も優れた兵器はヘリコプターだと確信している。例えば相手が、ファルコであろうとそれは変わらない。

ファルコ——アルファと同じ特務隊で、四機の戦闘機で編成された航空部隊。そして、その中でもアグレッサー（訓練用仮想敵機）に選出されるほどのエースだ。

それほどの相手に対して、これほどまで嫌味を言える人間もまた、ある種のエースなのかも知れない。

『言ってるよ。じゃあな、子守りはこれだけだ』

通信が途絶える。

『さっさと消えやがれ』

機長の呟きは、肝心のファルコ隊に届かないまま消えていった。

「なあ、あとどれくらいだ？」

不意に咲夜が尋ねた。普段から分隊の人間に対しても、極端に口数の少ないのがこの男だ。クールというより人見知りに近い性格の精鋭が、自分から口を開くとは。未来が、驚愕の表情で見る。

だが、そのわけを彼女はすぐに理解できた。いい加減にしてくれとでも言うように、咲夜は苛立ちを露にしている。つまるところこの青年は、早く戦いたくて痺れを切らしたのだ。

『曹長、少しは落ち着け』

アイザックがなだめるように言うが、咲夜は、

「了解」

の一言を返すのみである。

と、未来と目が合った。咲夜は、わざとらしく少し肩をすくめてみせる。彼がこんな仕草をする人物も、未来を含めて数えるほどしか

いない。そんな希少な行動にも関わらず、未来は呆れたようにそっぽを向いた。

『安心しろ、曹長。あと十分だ』

「了解」

だし抜けに、また後方で爆風が起こる。衝撃に揺れる機体の中で、咲夜はため息を吐く。まだ十分も、このちっぽけな機械に乗らなければならぬのだ。

捉えた。そう確信すると同時に、ロックオンした敵攻撃ヘリがこちらを向く。だがフランス・マクドナルド曹長は、既に携行ミサイルを発射していた。

クルセイダーと呼ばれるその誘導弾は、飛び出すのと同時に折りたたまれた四枚の翼を展開。白い尾を引きながら角張った形状の飛行機械へと突撃し、無骨な花火をこしらえた。

「上等兵、次弾をよこせ」

言うより早く、観測手であり給弾係の若者は、いま放ったのと同じ誘導弾を手渡す。にこりとませずそれを受け取ると、フランスは発射機の後部を開き、まだ僅かに熱を帯びる砲身にクルセイダーを込めた。

そして素早く周囲を見渡し、もうこの辺りには自分の相手がいないと悟る。

「移動するぞ」

「了解です」

今日は、獲物に困らないな。すぐ近くで聞こえる爆発音に囲まれ、この歴戦の狙撃兵は思った。彼とその部下の上等兵は、三日前に中東地方の戦場から派遣されてきた。そのときはもうロシア人を殺せないのかと落胆したのだが、なかなかどうして、運命というやつは侮れない。

ひび割れた岩壁と荒れた砂地しかないこの離島に、母国が最も気

にかけている国連軍が侵攻してきたのだから。普段、信仰心の欠片も持ち合わせていないフランスだが、いまこの時ばかりは神に感謝していた。これでまた、生きる目的ができた。

安全装置をかけた発射機を背負い、フランスは傍に置いておいた小型アサルトライフルV B - 20を持つ。

「地図あるか？」

「ええ、ここに」

部下のよこしたそれはこの周辺を細かく書かれた物で、いくつかの箇所に赤インクのマーカーがある。ここの来たその日の内に、フランス達が自ら回って探した狙撃ポイントだ。

数秒それを見つめると、一箇所を指して言った。

「ここだ。残弾はどれくらいだ？」

「三発です」

ふっ、と狙撃手は笑った。

「丁度いい。この場所であと一機落したら、ポイントC - 2Tの機関銃陣地まで下がって弾薬補給だ。了解か？」

「イエス・サー」

小気味良い返事を聞くと、珍しくフランスは二度目の笑みを浮かべて、合図も無しに走り出した。当然、上等兵も長年の付き合いだけあって、ぴったりと付いて来る。

どちらの身体能力も、並みの兵士を超えていた。一般的な歩兵装備より数倍以上に増した重量をつけて、800mほど離れた地点に着くまで三分とかからない。身を隠すに丁度良い岩陰に潜み、フランスは発射機を持ち上げる。

その時だった。新たなヘリが、前方700mほどを飛んでいる。長距離砲を避けるためか、機はかなりの低空飛行をしていた。

「距離確認」

上等兵は素早く従い、双眼鏡型の距離測定器を構える。センサーでも探知できない微弱なレーザーがまっすぐとヘリを捉え、レンズの右下に数列を表示した。

「確認、630。進路に変更無し。まっすぐこちらに來ます」
「続ける」

フランスが発射機の折りたたみディスプレイを開いた。そして肩膝について、ゆっくりと砲身を獲物に向ける。だがレーザーは照射しない。クルセイダー携行ミサイルの射程は800mだ。しかしフランスが撃つのは、必ず半分の400mになつてからだつた。

それというのも、彼がまだ正規部隊にいた頃の話だ。770mで放ったクルセイダーが外れ、撃ち損じたロシアの戦闘ヘリは彼の所屬した小隊を皆殺しにした。フランス自身も対地ロケットに半身を焼かれ、二年間のベッド生活を体験している。

いくら愛する祖国の説明書きとはいえ、彼はそれが信用できなくなつた。兵器どころか、味方すらも。それが、若者を狂気に驅られた兵士に変えた原因だ。

「600…570…530……」

攻撃までのカウントダウンを思わせる淡白な声で、上等兵は言い続けている。実際のところは、本当にそれがカウントダウンなのだが。そしてついに、距離は500mを切つた。

「480…460……」

ようやくフランスは、レーザーの照射トリガーを引く。視認することのできない閃光は、小型ヘリを液晶の上の四角いマークに収めた。甲高い捕捉音が響く。同時にフランスは、照射トリガーの上部に付いた赤い引き金を絞つた。

発射機が小さく跳ね上がり、先ほどと同じようにしてクルセイダーが放たれた。何とも言えない緊張と歡喜が、フランスの体内を満たした。子供のような笑顔をして、彼はそのヘリの最期を見届ける。

大した見物だつた。パイロットは模範的とも言える墜落姿勢を心がけ、失敗した。テイルローターを完全に吹き飛ばされ、バランスの保ち様がない。どれほど天才的なパイロットが操つても、同じ結果に終わる。高速で回転しながら落下したそれは、斜め方向から滑

り込むようにして墜落した。

楽しむフランスのその横で、若い上等兵はある一瞬を見ていた。墜落するヘリから落ちる、恐らくはそれが運んでいた一人の兵士を。

警告目的のブザーが鳴ったと思ったときには、機体が大きく揺れた。

『畜生がッ！』

副操縦士が叫ぶ。恐怖よりも驚愕が勝った声だ。

『ライリー、エンジンだ！ 早くエンジン切れ！！』

『わかってる！』

怒鳴り返してくるのを聞いて、機長はパージレバーに手を伸ばした。これを引けば、ヘリは装備しているミニガンとロケットを切り離してくれる。墜落は免れない。ならば危険性だけでも少しは下げなくては。何かの拍子で弾薬に引火したら、それこそ搭乗者は例外なく月の向こうまで吹き飛ぶことだろう。

普段は簡単に届くレバーが、いまは驚くほど遠い。高速で回転する機体は、乗る者に逸脱した重力を与えた。遂にそれを引くことは叶わなかった。

災難はそれだけではない。

『っ！？』

「未来！」

まさに間一髪。バランスを崩した未来が外へ投げ出される瞬間、咲夜がその華奢な腕を掴んだ。だがこれで咲夜の命綱は、片腕のみだ。

『離すなよ！』

誰かに背中を引っ張られた。咲夜はそう感じ、次いでそれがアイザックだと理解した。彼は懸命に、自分の部下を救おうと行動した。だがしかし、そういう時に限って救いは無いものだった。

ガクンと、ヘリが一際大きく揺れる。テイルローターから五十セ

ンチほどの箇所が、襲い掛かる重力にもぎ取られたのだ。その衝撃によって、咲夜の手から少女が離れる。

「未来!!」

叫んだときには、もう彼女の姿は消えていた。呆然とする咲夜だったが、どういうわけか何も感じなかった。ただ一人消えたという事実があるだけで、死んだかもしれない友への悲しみも、ましてやその原因となった敵への怒りも、何もなかった。

『畜生ッ！　つかまれ!!』

機長の叫び。四人の男に赤い大地が迫る。押し潰されんばかりの衝撃の中、咲夜の意識は消え失せた。

第二話

頭の中に、何かを感じた。意識的なものでなく、脳内に直接あるとわかる。

自分では無い何かが、そこに存在していた。

それが何かも、これから自分が何をすべきかも、咲夜は知っている。そう遠くない過去に一度だけ聞いた声が、再び頭に響いた。

<タイプ・シータ。自己診断実行：オール・グリーン。起動シーケンス、再試行。起動時障害：クリア。通常システムにて再起動。

5…4…3…2……>

声が消えた。

同時に、咲夜は意識を取り戻した。目を開くと、まず砲弾が炸裂する青空が見えた。数機の戦闘機が、高速でそこを駆ける。次いで聴覚が戻り、自分に呼びかけている男の声を捉えた。

「無事ですか？」

「…ああ」

上体を起こしながら、咲夜が言った。

男はまだ若かった。咲夜も十九の半ばだが、あまり大差はない。多く見積もっても、二十一かそこらだろう。

一般的な緑と茶色の迷彩をした、上下の戦闘服。要所を保護するプロテクターと、胸部には前後に抗弾パネルを詰め、表面に破片手榴弾を付けた、黒い防弾アーマーを肩から掛けている。頭部には、複合視界補助スコップ付きのヘルメット。目を保護するプロテクターゴーグルも、ちゃんと掛けていた。

それだけ見ても、この男が米軍の海兵隊員だと確信するのに充分だ。だが何より、肩の星条旗と斜めに交差したライフルを描いた隊章が、彼の所属を語る。

「起きたか」

こちらは聞き慣れた声。アイザックだというのは見なくてもわか

る。

「はい、大尉」

馬鹿のようにかしこまって、男は答えた。襟を見てみると、階級章がある。どうやら彼は上等兵らしい。

米軍が制式採用しているM28の後継、短縮型M36アサルトライフルをやはり他の兵士と同じようにスリングで吊っている。上等兵はダットサイトの他、射撃安定用のフォアグリップをそれに追加していた。

「どうなっ たんです？」

尋ねる青年に、大尉は見ての通りだと後方を示す。5、6mの岩壁に追突し、搭乗員を閉じ込めるように前部が潰れた、HSH-68の無残な亡骸があつた。火は出ていないが、僅かに黒煙が昇っている。

「俺達が助かつたのは、幸運だつた。回転翼の一枚が、コックピットとパイロットを串刺しにしている。助け出してはやりたいが、手立ても時間も無いからな。すぐに出発だ」

「…桜木はどこです？」

「探す時間は無い。ヘッドセットも壊れている…無事を祈っている…彼等は…？」

先ほどの海兵隊員を目で示す。いま気付いたが、先ほどヘリの上で会つたムーアという少尉までいた。彼は大出力の無線機を手に、なにやら話し込んでいる。

「ヘリが墜落したのが、偶然にも彼等の近くだつた。国連の精鋭が、国連内の最弱国に助けられたわけだ」

冗談めかして、アイザックは笑つた。表情がどこか暗いのは、少女の身を案じているからか。もしくは彼女の死を認めようとしているからだつた。恐らくは、後者が正解。

「曹長」

誰かが言つた。最初、それが自分の事なのだと咲夜は気付かなかつた。

「キサラギ曹長」

名を呼ばれようやく振り返ると、先ほどとはまた別の海兵隊員がこちらに向かつてきている。ヘルメットを脱いで、市販の紙煙草を啜えたスキンヘッドの男。30の半ばといった外見だ。

ベテランなのだろう。戦場の真ん中だというのに、この男からは余裕のようなものが垣間見える。状況がわかっていないのではなく、理解したうえで冷静に行動できるタイプの人間だ。

隊員は二つの銃器を持っていた。分隊支援火器と言われるM70軽機関銃と、M28——咲夜の物だ。思えば、咲夜はいまライフルどころかハンドガンすら装備していない。あるのはサミダレだけだ。「勝手に触らせて貰いましたが、勘弁してください」

笑いかけながら、M28を手渡す。見ると、ダットサイトが別の物に取り替えられていた。小さく薄い四角形のレンズに、レーザーで照準用光点を表すホロサイト。性能的には、ダットサイトのそれと大差ない代物だ。

それ以外に変化はない。この銃は母艦からへりに乗り込んだ時と全く同じ状態だった。だからこそ咲夜は驚いた。低空飛行していたとはいえ、墜落はそれなりの衝撃を与える。銃器が壊れてもおかしくない、むしろそれが普通だ。

「グラント・インターナショナル・アームズ国連がG I A製を採用してて良かった。おかげで、手持ちの工具とパーツで修理できました」

「直したのか？　ここで？」

「そりゃあ、俺は技術屋なんでね」

見返してくる咲夜に、白い煙を吐いて男はそう言った。

「大尉」

今度は聞き覚えのある声。ムーア少尉だ。

「本部から特務への協力許可が下りました。現時刻をもって、第十六小隊はあなたの指揮下に入ります」

「了解した」

アイザックは言って、頷く。次いで、ムーアは自称技術屋の隊員

を向いた。

「コリンズ伍長、部下を集める。一分後に作戦確認を行なう」

「了解」

煙草を放り捨て、コリンズは早足で踵を返す。その寸前、

「そうだ、曹長」

振り返ると同時に、飛んできた物体を咲夜は片手で受け取る。

銀色のステンレスで出来た銃身のそれは、BC2と言うハンドガンだった。一般的なそれよりも一回りほど小さな拳銃だが、使用するのには先ほどまで咲夜が持っていたM221と同じ9mm弾である。取り回しやすさから、軍用よりも警察機関や民間の警備会社で採用される。

「俺の予備ですみませんが、我慢してください。マガジンはM221の物を共有できます。あなたのは大尉のを修理するとき、バラしたもんで」

「ああ、助かる」

コリンズは満足げに頷き、駆けていった。

「試してみます」

何を、と二人の士官は聞こうとしたが、口には出さなかった。

受け取った小柄な銃身をホルスターに収めながら、咲夜は駄目もとでヘッドセットのスイッチを入れる。アルファ隊が採用するヘッドセットは、小型且つ強力な通信機を内蔵してあるため、外部の通信機と接続する必要がない。極端な話、故障さえなければ通信衛星を介して地球の裏側とも連絡を取れる。

直径1mmほどのランプが、赤く光った。電源は問題無い。あとは通信できるかどうかだ。

「アルファ2-2よりCP、応答してくれ」

短い言葉の後、返答を待つ。だが幾ら待っても、一秒、二秒と、時間が過ぎるのみ。

「だめか」

微かに落胆を露に、咲夜はヘッドセットを取り外して捨てた。

期待はしていなかったが、かといって簡単に割り切れるものでもない。今のところ連絡手段は海兵隊の無線機のみ。悪くは無いが、あくまでそれは米国側司令部との連絡手段である。国連軍司令船と直接の連絡はできない。

もし特務輸送船に繋がれば、未来を捜すための増援を呼べたかもしれない。そんな希望もあったのだ。

「如月」

考えを察したらしいアイザックは、自分の装備を点検しながら告げた。

「わかつてると思うが、軍曹の事を想うなら任務に集中しろ。目標を陥落させれば、味方の航空部隊が5分でやってくる。搜索も可能だ」

「了解してます」

そう言い残して、咲夜は集結した海兵隊員達の下に歩いていった。「信じられませんよ」

黙って聞いていたムーアだったが、静かにそう口にしていた。

「彼も、あなた方の軍曹も。少年兵ってほどじゃないが、だからと言って特務にいるような歳でもないでしょうに」

深いため息。

「酷ですよ」

絞り出すような声。そこに込められた感情が何だったのか、アイザックには解らなかった。

それほど遠い年月は経っていないというのに、いろいろなものを無くしてしまったように思う。自分だけではない。部下の二人も、他の特務隊員達も。皆が何かしらの感情を欠落してしまっている。「ブリーフィングだ」

そんな言葉しか出せない自分が、どうしても人間には見えなくなっていた。

アルファ第二分隊と海兵隊第十六分隊から約2 km西の岩場に、三人の男達は降り立った。

『アルファ、こっちは上から可能な限り支援する』

「2 - 3、了解。幸運を」

ローターの出力が上がり、HSH - 68は飛び立った。轟音の中で、舞い上がった砂埃と小石がしばしの間だけ視界を覆う。幸いにも、しっかりと装着した透明なプロテクトゴーグルのおかげで、それらは目の中に侵入することはなかった。

この三名は国連という多国籍軍の名のまま、実に変わった人種の組み合わせだった。35歳でドイツ人分隊長のハロルド・バーゴツプ、29歳のロシア人狙撃手グスターブ・アレクペロフ、二週間後に21歳となる日本人観測手の月霧双夜^{つきぎりそうや}。それぞれが第二分隊と同じ黒色の装甲戦闘服と、同型の装備品で武装している。

三人は岩陰に身を隠すように着陸地点を陣取り、双夜とグスターブがそれぞれ周囲を警戒する。その間、ハロルドは通信機内蔵のヘッドセットへと語りかけていた。

「CP、CP、こちら2 - 3、降下地点確保。これより目標へ移動する」

『2 - 3、こちらCP。2 - 2が遅れている。決行時間に遅れた場合、突入経路6を使用して2 - 1と制圧しろ』

「トラブルか？」

『ヘリが撃墜された』

「なに？」

思わず双夜が振り返る。アルファでは基本的に分隊全員に対して通信回線が開かれるため、今の会話も二人に聞こえていたのだ。

「双夜」

低いロシア人の声に、すぐ視線をダットサイトに戻す。それを待つて、ハロルドも続けた。

「状況は？ 奴等は無事か？」

『レオハルト大尉とキサラギ曹長は米海兵隊に保護されている。し

かしサクラギ一等軍曹がヘリから落下したらしく、未だ行方不明と
なっている』

「了解」

ここまで無感情に言われたんじゃ、不安も消えるな。

ハロルドが返事を返す中、声に出すのは堪えて双夜は胸中で呟く。

『ツクギリ軍曹』

「あ？ ああ、こちら月霧」

いきなり名を呼ばれたため、面を食らったよう気分だ。

『親友が気になるのはわかるが、任務に集中してくれ。了解か？』

「了解、CP……クソツたれの事務屋が」

最後の台詞は、通信が切れたのを確認してから、唾と一緒に吐き
捨てたものだ。

「そうカリカリするな。もう一度、ジノゼアム（精神安定剤）でも
打つか？」

「遠慮します」

双夜が答えた瞬間、三人は同時に動き出した。2 mほどの間隔を
取りながら、敵が見えればすぐに発砲できるように伸縮ストックの
底を、常に右肩に着けておく。いままで実戦でも訓練でも、何千と
繰り返してきた姿勢だ。

先頭に立つハロルドが駆け出し、同時に双夜とグスタブも続く。
内部に鋼鉄を仕込んだコンバットブーツの硬いゴム底から、ゴツゴ
ツと荒れた大地の感触が伝わる。山岳地帯での訓練を思い出したが、
それよりも酷い足場だ。

40 mほど前進して、ハロルドは不意に立ち止まった。手近な岩
へ素早く隠れ、残る二人も別々の場所にかがみ込む。その数秒後、
グレネードランチャーを撃ったようなボン、という奇妙な音が聞こ
えた。隙間から様子を窺うハロルドが、ヘッドセットを介して伝え
る。

「前方に敵歩兵、5名。野戦用の小型迫撃砲が…2門だ。アレク、
ここで待ってろ」

「了解」

8倍率スコープを取り付けた無骨なSB80セミオートライフルを抱え、グスタープは頷く。次いで、ハロルドと双夜は屈んだ状態で別々に移動する。その間にも、迫撃砲からは拍子抜けするような音が続いた。

敵は双夜達から見て20m先、比較的平たな開けた場所に陣取っていた。その周囲には、常人の倍はありそうな大きさの岩が連なっている。航空機からは見えずらく、歩兵部隊も楽に発見することはできない。双夜達には幸運だが、敵にとっては想定外の悪運である。

ゆっくりと時計回りに進むと、ひび割れた岩を見つけた。手で触ってみると、それだけでボロボロと破片がこぼれる。一つの案が、双夜の頭に浮かんだ。

「大尉、C5（小型設置爆薬）の使用許可を下さい。良さそうな岩を見つけました」

「わかった。へまするなよ」
「了解」

言うが早いや、双夜は左胸のポケットから手のひらほどの大きさをした、長方形のプラスチックケースを取り出した。開けると、中にはコイン大ほどの黒い円盤型の物体が四つ。中心に小さなランプとボタンが一つずつある。その威力を見るまで、誰もこの円盤で戦車が消し飛ぶとは信じない。

その内の一つを手に取り、裏側のカバーを剥がす。シールと同じ要領だ。粘着剤がついているから、岩でも金属でもくっつく。なるべく岩への衝撃を抑えるように、ちょうど中心となる位置にC5を貼り付け、ボタンを押した。ランプに緑の明かりが灯る。

傍の岩陰に隠れながら、次いで今度は右腰——ハンドガンを収めたホルスターの横にある、通信機のようなものを掴む。大きさの割に、上下に二つのスイッチがあるだけ。

『月霧、準備はいいか？』

「いつでもどうぞ」

上の方のスイッチを押すと、下にあるもう一つが赤く点滅し出す。

『アレク、迫撃砲の弾薬を狙え』

『了解：捉えました』

『カウント3で行くぞ。3：2：1、GO！』

グスターブのロシア製ライフルから8、35mmの弾丸が飛び出すのと、双夜がC5の爆破スイッチを押すのとはほぼ同時だった。岩が爆発した瞬間、円筒形の迫撃砲弾が一発の銃弾に貫かれ、近くにいた一人の兵士を巻き添えに爆発する。更に別の砲弾が誘爆し、第三分隊が銃撃を始める前に3名の敵が死んだ。

残りの二名にも、反応する猶予は無かった。ハロルドが、一人の顔を三点射撃で吹き飛ばす。同時に、双夜が砂煙の中から最後の一人に向けて一発だけ放つ。銃口から出た5、56mmのするどい弾は、その兵士の眉間から頭部へ侵入し、そして後頭部の大半を吹き飛ばしながら飛び出ていった。脳からの信号が途切れた男は、頭を引っ張られるようにして倒れた。

素早く周囲を見渡す。だが今の一方的な戦闘に、敵は気付いていないらしい。援軍が来る様子はない。

「クリア、アレク」

『了解』

数秒後、グスターブが二人に合流する。

「行くぞ」

再び前進を開始しようとハロルドが声をかけた。

「ん？」

双夜の瞳が何かを捉えた。焼け焦げたモスグリーン迷彩の戦闘服を着たそれは、確かに生きて、そして動いていた。誘爆に巻き込まれた二人の内、一人だ。

「まだ息があるのか」

言いながら、その兵士に近づく。まだ生きているとはいえ、全身に火傷を負っていた。放っておいたとしても、三十分もしないうち

に死ぬだろう。

「……う……ぐ……」

潰れた声のうめきが、彼の返事だった。

双夜は銃口を男の頭部に向ける。

「助けて、くれ……」

男が言った。しゃがれたような、酷く聞き取りにくい英語だった。

「降伏する……家族が、いるんだ……」

「……何人だ？」

半ば諦めていたのだろう。男は意外そうに双夜を見た。

「妻と、娘が一人……もうじき、二人になる」

「そうか。そいつはめでたいな」

しゃがみ込んで、双夜は男の目を真っ直ぐと見据えた。青い目には、恐怖の色が滲み出ている。

「俺にも、妹が一人いる。両親もいるが、俺達は親の愛情の代わりに殺しを教えられてきた。ガキの頃から、気付いたらずっと軍隊訓練施設にいた」

そこまで言い終えると、双夜は立ち上がった。

「そこで覚えさせられた。俺も妹も、軍隊と戦場をな。そして、一つだけ絶対の掟があった。わかるか？」

虚ろな視界の中、男は再び向けられる銃口と、引き金にかかる指を見た。

「よせ……」

同時に、銃声。頭蓋に穴を穿った男は、死の恐怖に目を見開いたまま、息耐えていた。

「全て殺せ、だとよ」

死体となった敵兵に言い残し、双夜は部隊に戻った。彼は、また掟を守ることに成功したのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1946h/>

降り積もる雪は灰色に

2010年10月10日01時10分発行